―あの日の神戸―

山本れい子著

山本れい子
昭和35年12月20日に生まれる。
神戸市東灘区で被災。地域の中からボランティア活動が必要という信念のもと、専門家のお二人の協力を得、グループを結成。
（手話ボーカル）—手話での会話はできません—

山本れい子

ボランティアグループ“あいうえお”

平成8年4月“あいうえお”誕生
震災体験がきっかけとなり、仮設住宅を中心にコンサート活動を開始
“高齢者の方々の心の支援”をモットーに現在に至る
〈メンバー紹介〉
立木直子（声楽家）
母校大阪音楽大学ポピュラーコーラス科非常勤講師
OSK日本歌劇団声楽指導
オフィス・ナウ社長
森下保子（バイオリン奏者）
宝塚歌劇団オーケストラを経て、現在母校大阪音楽大学ザ・カレッジオペラハウス管弦楽団団員

あの日の神戸

1997年9月29日　初版発行

著者／山本れい子©
発行／（株）教育出版センター
〒170東京都豊島区北大塚3-29-2
TEL:03-5394-1201（代）
印刷／電算印刷（株）

Printed in Japan　NDC369　64頁
ISBN4-7632-5157-0

あの日の神戸

山本れい子著

江苏工业学院图书馆
藏书章

教育出版センター

もくじ

1. 地震の前の異変……4
2. 1月13日参観日……6
3. 地震！　そのとき……8
4. 地獄図絵……10
5. 夢遊病者の私……14
6. 家族をさがして……22
7. それぞれの一日〈兄の手記〉……24
8. とまった時間の中で……31
9. 不気味な余震（よしん）……33
10. 情報のない暗やみ……36
11. 地震発生　二日目……38
12. 避難勧告（ひなんかんこく）の波紋……39
13. 子どもたち疎開（そかい）……40
14. 地震発生　三日目……42
15.「行方不明」の貼り紙……46
16. 憎い　取材ヘリコプターの爆音……48
17. 町を歩く……50
18. ありがたい人のまごころ……52
19. 大好きな先生の訃報……54
20. 災害は忘れたころに―……56
21. 祈る日々を生きる……61

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

1　地震の前の異変

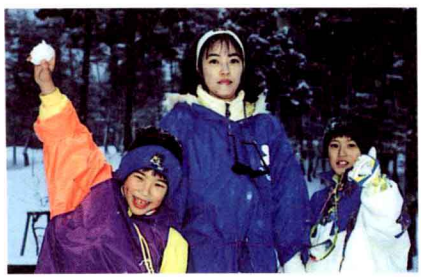
平成6（1995）年9月　外はすごい雨だ。北東の方角から稲光。何度も何度も雷がおちる。

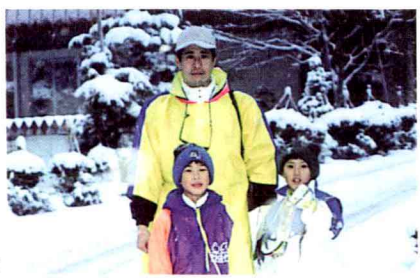
今年は、水不足でたいへんだった。四国ではとうとう給水時間を制限するという異常事態になった。日照りが続くかと思えば大雨になる異様な気候だった。その大雨は、豊中（とよなか）・伊丹（いたみ）・箕面（みのう）と床上床下浸水の被害をもたらし、伊丹空港は地下の電気室浸水で一時閉鎖となった。12月になり、川西の猪名川町では群発地震が続いているとのニュースだ。私はとくに気にもせず画面を見ていた。時折、家で揺れを感じていたのもこのころだった。だが、その揺れは横になったとき、微かに感じる程度で、よもやあの恐ろしい日につながる前兆とは思いもしなかった。

平成7年1月　冬休みも終わり、子どもたちの学校もはじまり、静かな日常が戻った。

1月に入って青空を見ていないことに気づいた。なぜかいつも暗く重い感じがしたのは気のせいだったのか？　もうひとつ気になったことはNHKと関西テレビのうつりが異常に悪く、雨が降ったような乱れた画面だった。

地中から放出される電磁波が、電波障害を起こしたのか？　自然はなにか前ぶれを私たちに教えてくれているような気がする。それをキャッチできない私たちに問題があるのではないか？





95/01鷲ケ谷スキー場にて

2　1月13日参観日

二人の教室をのぞき、目で「来たよ。」と合図し、書き初め展を見に体育館へ行った。ひろびろとした体育館の中に、元気な子どもたちの習字が並んでいた。その日は参観の後、保護者会があったが、私は参加せず家に戻った。学校から帰った俊輔が、
「お母さん、吉岡先生とあくしゅした。」と言った。
「なんで？」とたずねると、
「3日間の休みやから。」
「うん。」
「また17日に元気で会おうね。」って
「そう。」
そんな会話のむこうに、だれにも予想のできない悲しい別れが待っていた。

94/09　運動会　吉岡先生と子供たち

3　地震！　そのとき

　1月17日午前5時46分。突然だった。
「何が起こったのか？」しばらくはわからず、揺れに身をまかせていた。
　額（ひたい）にすごい勢いでなにかがとんできて強くぶつかった。本棚が私の上に落ちてきた。
　とっさに勇希の上にかぶさった私の身体の上で、本棚のガラスがこなごなに散った。
　まだ明けやらぬ暗やみだったのに、なぜか明るく部屋のようすがわかった。
　ながいながい時間に感じられた揺れが終わり、静寂が戻った。
　シーンと張りつめた空気が流れた。
「地震や、れい子。すごいぞ、大丈夫か！　ジッとしとけよ。」主人の声が聞こえた。
「本棚が倒れて動けない。」
「今行くから待っとけよ。動いたらあかん。」
主人の声もうわずっていた。
「俊、ここにいとけ！　お母さんを見てくるから。」
「……。」
　一人リビングでとり残された俊輔は、すごい揺れのため、ひとりでにあいた窓ガラスの外に目をやった。
「白い煙が舞ってる。ガスの臭いや…。助けて、助けてって男の人が言ってる。」と本棚を持ちあげている

主人に叫んでいた。
　私と勇希は本棚から解放され、けががないか確認し、一瞬にして散乱した部屋を見まわした。
「地震？」と私。
「地震や、すごいぞこれは。」と主人。
「お母さん早くきて。」と俊輔がどなった。その声にわれにかえり、リビングまで足の裏を切らないように慎重に歩いた。俊輔は、恐怖のあまりかたまっていた。
　しばらくしてドアをたたく音がした。
「山本さん、だいじょうぶですか？　ドアは開きますか？」
「いいえ。」
「こちらからひっぱりますので。」
「お願いします。」
ドアは上階の重圧で枠とドアの上部が湾曲していた。
「みなさん、けがはありませんか？」
やさしいひとことに、涙がでそうになった。
　子どもたちに身じたくをさせ、外に出る用意をした。窓の外では、助けを求める声も小さくなっていた。私たちは、自分たちのことで精一杯だった。
「外にケガをしている人がいるみたい。早く助けてあげて。」と主人に伝えた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

4　地獄図絵

マンション前の民家1階部分が壊れている

目の前に広がる光景にぼうぜんとした。

天上川をはさんで西の民家は、1階が壊れ、家屋の下敷きになった人の家族が助けを求めていた。北に目をやると倒壊(とうかい)した文化住宅に足をはさまれ身動きとれずに倒れている老人がいた。主人はなんとかその老人を助け出そうと必死になっていた。

私は、何もできないと悟り、マンションのエントランスに戻った。誰かが、

「青木の方で火の手があがっている。」と言った。

心臓がとびだしそうになった。私はあわてて外に出て南の方角に目をやった。

赤い炎が、明るくなりかけた空を燃やしていた。青木には兄のパン屋がある。

朝早くから火を使う仕事なのだ。心と頭がまっ白になった。

ただただ無事でいてほしいと願った。

動揺の中で、知人の懐中電灯をかり、子どもたちを頼み、ガス臭い町なかを走った。

甲南商店街

福池小学校南側アパート

本山南町9丁目。電柱が西側から東側に倒れている。
断層が走った方向なのか？

本山南町・1階が壊れ傾く住宅。

5　夢遊病者の私

福池小学校の南門までたどりつくと人があふれ、夢遊病者のように北へ北へと歩いていた。

人波をかきわけ、倒壊(とうかい)した家々を目(ま)の当たりにし、ことばなくひたすら走った。

心の中で、

「どうしてこんなことに。」と何度も何度も繰り返していた。

無意識のうちに私は、父母の住むマンションの前にいた。

兄の店へ向かうはずが……。

福池小学校北側

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c